

---

# 復讐を手伝いし者

夢見心地

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

復讐を手伝いし者

### 【Nコード】

N7580P

### 【作者名】

夢見心地

### 【あらすじ】

神？のおかげでめだかボックスの世界に転生する青年の話。

オリ主で最強設定です。作者はど素人で、処女作です。そういうのがお嫌いな方は戻るを推奨します。

## プロローグ

ここは・・・どこだろうか。

目を覚ましたら暗い空間？にいた。光がなく、自分の体すら見えな  
いほど暗い。

ここで俺の名前を言っておこう。

俺の名前は西川公平。にしかわこうへい18歳のいたって平凡な男だ。

「ようやく来たようだね」

「んあ？」

いつの間にか目の前には白と黒が混じった髪をしている男がいた。  
だがこの雰囲気は・・・人ではないな。

そして暗かった空間？が、いきなり真っ白な空間になりやがった。

「よくわかったね。そう、私は人ではないのだよ」

「ッ!？」

おいおい、こいつ心を読みやがったぞ!？まさか・・・神なのか？

「ふむ、神ではない。が、神に近い存在だと思えばいい」

「その神が俺に何の用があるんだよ」

「そうだね、まず君は死んだ」

「What?」

「だから、君は死んだのだよ」

「はあああああああああああ!？」

ちよっ!？俺死んだのかよ!？なんで!？Why!？

「落ち着きたまへ。・・・で、なぜ死んだのかと言うと、私の部下が君の寿命の？燭の火を消してしまっただよ。気づいたときには既に手遅れだった」

「なんとという・・・ことだ・・・orz」

まさか死んでしまうなんて・・・。まあいいか。所詮つまらない人生だったからな。

しかし、やりたい事とか微妙に残ってたんだがなあ。

「やりたい事とは？」

「めだかボツクスっていう漫画をまた最初から読みたかったんだよ」

「なるほど、それが心残りなんだね？」

「ああ」

あれは中々面白い漫画だからな。大嘘憑きをオールフィクションと読むとか素晴らしいじゃないか。

「なら、君に第二の人生を与えよう。転生という形で良いかね？」

「・・・マジで？転生してくれるの？」

「ああ、部下の責任は上司の私がつるものさ」

「で、その転生先って・・・」

「勿論、めだかボツクスの世界さ」

「イイヤアアアホツツオオオウウウウウ！！！！」

夢にまで見ためだかボツクスの世界に行けるんだ！うっう・・・。目から汗が・・・。

ありがとう神様！！

「それほどでもないさ。さて、転生するに至って特典を5つあげよ

う

「特典？何それ？」

「たとえばだね・・・身体能力を向上させたり、他の漫画の能力を使えるようにしたり出来るようにすることさ」  
「なるほど」

と、いうことは・・・『過負荷』なんて目じゃないってことか？  
いや・・・あの世界の『異常』全員と戦っても勝てるということか！？

それは・・・すばらしいチートだ！

「では、早速特典の内容をいいたまへ」

「じゃあ・・・」

- 1・身体能力及び頭脳の向上
- 2・過負荷の能力を与えてほしい
- 3・異常の能力を与えてほしい
- 4・とある魔術の禁書目録の一方通行の能力を与えてほしい
- 5・俺の容姿を変えてほしい

「この5つだ」

「ふむ、容姿の方と過負荷、異常の能力はどうするのかな？」

「まず容姿だが（能力共々主人公設定に書きます）」

「それでいいのかな？」

「ああ！」

「・・・・・・終わったよ」

「早！？」

「私にとってこれは造作もないことだよ」

ははは・・・さすが神だな。

「・・・まあいい。さて、そろそろ送るよ?」

「ああ、準備OKだぜ!」

「では、君は転生を受け入れたまへ!」

そう神が言った瞬間、俺の意識は暗転した・・・。

-----

「いったようだね」

「エエ、ソウネ。デモ、貴方ニシテハ珍シイコトヲシタワネ」

「そうだね・・・。彼には僕と同じ道を歩んでほしくなかったからかな?」

「フフ・・・優シイノネ」

「優しくはないさ。事実、僕の部下の不祥事で起きたことだからね。あれくらいはしなないといけないだろう?」

「ソウネ・・・。デ、アナタノ部下ノ処遇ハドウスルノ?」

「一年間トイレ掃除にしようかな?」

「ウフフ、ソレデイクマシヨウ。アハハハハハハ!」

暗い空間で、少女の笑い声だけが響いた。

## 主人公設定（前書き）

主人公のおおまかな設定です。

## 主人公設定

FATE風に書かせていただきます。

【名前】 西川公平

【性別】 男性

【身長・体重】 170cm 65kg

【属性】 中立・悪 変態

【筋力】 C

【魔力】

【耐久】 EX

【幸運】

【敏捷】 A

【宝具】

B

【容姿】

白と黒が混ざった髪を肩まで伸ばしている。顔は上の下。それ以外は普通。

【性格】

厄介ことには関わりたくない。が、厄介ことが向こうからやってくる。

女の子の復讐を手伝うことを生きがいにしてる。

幼女性愛者であり紳士でもある。女の子が目の前にいるだけでごはん3杯は楽勝らしい。

たとえ年上でも、見た目少女（幼女）ならいらしい。

【宝具つばいなのか】

全ては我が幼女のために：B

半径100m以内にいる幼女の数だけ幸運・宝具以外のランクがアップする。



【能力】

アベンジタイム  
復讐劇：『異常』の能力。様々な人の復讐を読み取り、それを実践することが出来る。相手の脳に直接ぶつけることもできる。実践している間は、復讐者の能力を扱うことが出来る。ちなみに、復讐の読み取りは世界全域。

少女（幼女）の復讐しか使わない。

アベンジコール  
復讐歌：『過負荷』の能力。復讐の意思を持っている屍人しこんを7人だけ蘇らせて、復讐させる。復讐は、主人公が闘っている敵を倒した（殺した）後に行われる。使い辛いがその分強力な『過負荷』。世界の理を捻じ曲げている為、『大嘘憑き』では無効にできない（嘘にされない）。少女（幼女）だけしか蘇らない。

一方通行：皮膚に触れたベクトルを自由自在に操ることが出来る。  
戦闘及び家でしかつかわない。

【保有スキル】

戦闘続行：A

生還能力。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

変態：A

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

幼女探求：EX

半径1km以内ならどこに幼女がいるか分かる。

復讐援助：EX

復讐の手伝いをする時、『一つ』だけ世界の理を捻じ曲げることが出来る。(たとえば、復讐したい少女(幼女)がいるとしよう。その女の子の前に一瞬で移動することが出来る)。

以上です。

## 主人公設定（後書き）

たまに修正したりします。

ちなみに、ここで載っていない技がです。能力のアレンジもです。設定もです。

ご了承下さい。

## 第一曲

俺が転生してから15年が過ぎた。15年間は少女達の復讐を手伝ってきた。

それはもう、数えきれないほどにな。

中には復讐相手を殺す手伝いもした。その時、ほとんどの奴が

「罪悪感はないのか!!」

と言ってきたが・・・あるわけがない。

俺は手伝いをしているだけであり、殺される理由を作ったのは相手だしな。

こんなこと黒神めだかにいったら、即効更正させようとするのかな？  
ふっ・・・無駄だがな。

さて、15年経った今、俺は今どこに居るでしょうか？

答えは・・・

「箱庭学園校門前だぜ！」

俺の叫びに回りの生徒が驚いてやがる。

でもそんなの気にしない気にしない。今はこの喜びを噛み締めるだけだ！

「うへへ、ついに原作介入に近づいてきましたなあ」

まずは誰に会おうかな？うむむ・・・人吉かな？

同じクラスだと良いんだが・・・。クラス表でも見に行くかな。

「死せる今〜いくら憾めど刻は既に遅く〜」

お気に入りの曲を歌いながら歩いていくと・・・なんと目の前に人吉がいるじゃないか。

これは願ってもないチャンス！

「ちよいとそこの君」

「あ？」

「クラス表ってどこにあるのかね？出来れば案内してもらいたいんだが・・・」

「あー、俺も見に行こうとしたところなんだよ。一緒に行くか？」

「おお、ありがたい。では、一緒に行こうか」

「ああ」

くくく・・・これでいい。

ちなみに、俺の口調がおかしいのは初対面の相手だとあなるからだ。

「そういえば、君の名前はなんだい？」

「あー、そういえば名乗ってなかったな。俺の名前は人吉善吉だ」

「ふむ、私の名前は西川公平だ。以後よろしく」

「よろしくな！」

これでもう人吉とは友達だ！やったね！！

「っと、着いたようだね」

「だな」

えーと、どれどれ・・・一年一組・・・ということは

「どうやら人吉と同じようだね。早速教室に行くかい？」

「いや、俺は用事があるからまた教室でな」  
「了解」

――教室――

おお・・・誰もいねえ。どういうことだ？

「何故誰も教室にいないんだ？イジメか？」

その時校内放送がなった。

『まだ教室に残っている生徒は至急体育館へ移動してください。繰  
り返します』

なんと、体育館に移動しなきゃいけないんか！？

おそらく、遅れたら最初のうちに黒神めだかに目をつけられるだろ  
う。それだけは阻止しなければ！

「急がんと・・・色んな意味で死ぬ！」

急げ急げ急げ――！！

――体育館――

ふう、何とか間に合ったか。まったく、この学園広いだよ！途中  
で道に迷ったじゃないか！

つと、黒神めだかの演説が始まるぞ。

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実 is 適当か？安心しろ、それで  
も生きるとは劇的だ』

生きることが劇的ね・・・それは否定しないね。

まあ、一人一人の人生が劇だからな。そこで描かれるのはなんであれ、個々の頑張り次第さ。

しかし、生きるとは逆に苦しさ、悲しみ、辛さも生む。俺が手伝ってきた少女達はおそらくだろうが・・・笑えぬ喜劇だったと思う。

『悩み事があるなら迷わず目安箱に投書するがよい。24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける!!』

こうして、俺の原作介入に向けて世界は歩き出した。  
さあ、俺の転生劇の幕開けだ!

## 第一曲（後書き）

主人公の髪は目立ちます。が、これ以上に目立つ存在がごろごろいるので無視されています。だが、目立つものは目立ちます（色々な意味で）。



## 第二曲

あの演説が終わった後、サクツと用事を終わらせて教室に戻ってきた俺だが・・・人吉がナイス少女となんか話しているのを発見したわけだ。

許すマジ人吉！だがここで出て行っても話に水を差すことになる。仕様がなない。気配を消して人吉の後ろに行くか。

「・・・？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもねーよ」

おいおい人吉君よ。俺の存在に気づきかけやがるとは・・・やるね。

「で、とーぜん人吉は生徒会に入るわけ？」

「カツ！なわけねーだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるか  
つての」

おや？人吉君人吉君、後ろに生徒会長こと黒神めだかがいますぜ？  
まあ、気づかない方が普通なんだがな。

「俺は絶対！生徒会には入らない！！」

「・・・」

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」

「！？ギヤアアアア・・・」

あらら、連れ去られちゃったか。

「で、いつまで気配消してるわけ？」

あら！？バレた！？

「さてさて、何のことかな？」

「隠しても無駄だよー」

「・・・はあ、そのようですね。私の名前は西川公平。お嬢さんは？」

「私は不知火半袖だよ。よろしくね」

ぐっはッ！？笑顔でよろしくね　なんて言われたら俺の精神がゲシユタルト崩壊寸前に・・・！  
恐ろしい・・・なんて恐ろしいんだ不知火！！

「で、西川は『異常』なの？」

「さあね、それは教えられないよ。ただね、『狂人』であることは間違いないよ」

「・・・そう」

「では、私は暫し睡眠を取るのでこれ以上は話せれない」

「ふーん、じゃあお休み」

「ゴハッ！？・・・お休み」

くっ！夢にまで見た『美少女（幼女）にお休みなさいと言われる』という大拳を地味になしてしまったぜ・・・！  
あまりの可愛さに吐血してしまった・・・。まあいい。寝れば治るだろ。

そうして俺の意識は宵闇に落ちた。

―――放課後―――

今回の復讐は中々興味深い復讐だったな。あれが俗に言う『ヤンデ

レ』なのかね？ちょっとだけ寒気が奔ったぞ。

つと、そういうえば剣道場の話は今日からだっけ？まあ、興味ないからどうでもいいんだけどね。

つーわけで帰るかな。

「さてと、帰るか」

俺が鞆を持っていざ帰ろうとしたら

『一年一組西川公平君、至急理事長室まで来てください。繰り返します  
』

「ああ？」

いつか乗り込もうとしていたら向こうから来やがるとは・・・いいねえ！

行ってやるうじゃないの！！

――理事長室――

まずはノックだな。

トントン！

やべ、強く叩きすぎたか？まあ、頑丈そうな扉だから大丈夫だと思うけどな。

「入りなさい」

「失礼します」

扉を開けるとそこには見た感じ校長しかいない。が、あちらこちらに6人の気配を感じる。

くくく・・・おもしろえ。

「急に呼び出してすまなかったね、西川君」

「まったくですね。で、私を呼んだ理由は何です？」

「せっかちはいけませんよ？そうですね、この8個のサイコロを振ってみてください」

この爺・・・俺を『普通』<sup>ノーマル</sup>か『異常』か調べようとしてるな。

「やればいいんですね？」

「そうですね」

「はいはい」

サイコロを一斉に投げた。

すると、1つのサイコロは砕け散り7つ全てが1だった。

「これでいいですか？」

「も、もう一回投げてくださいか？」

「面倒ですね・・・」

と、いいつつ投げる俺って優しいな。こんな爺相手に優しくしても吐き気がするだけだが・・・。

今度の結果も前回と同じ結果になった。

「・・・実はお話があるんですが」

「フラスコ計画のことなら聞かんぞ」

「何故それを！？」

「さあ？何ででしょうね？」

正解は原作を知っているからだが。

「知っているなら話が早いですね！君も是非フラスコ計画に参加しませんか？」

「断る」

「な、何故ですか！？」

「そんなの決まっているじゃないですか」

俺は両腕を広げ宣言した。

「少女や幼女を巻き込んでいる実験に誰が手を貸すか！逆に潰してやるよ！！」

そう宣言した後、理事長室を後にした。

――帰り道――

さて、どうフラスコ計画を潰そうかな？・・・やはり生徒会か？

おそらくだが、俺の『復讐劇』アベンジタイムは黒神めだかの『完成』ジェントの能力を受けないだろう。それに生徒会に入った方が何かと便利そうだしな。

しかし、いきなり生徒会に入れるのかな？入れたとしても人吉と同じく庶務からだろうが・・・。

だが、生徒会に入ったとすればいつか黒神に説教（という名の更正）されるだろう。

よし！生徒会に入るのは止めよう。決して更正が嫌なわけじゃないよ？本当だよ？

そして原作介入するのは雲仙冥利うんせんみょうりがヤラレそうになった時を狙う！さあ、原作介入の始まりだ！

## 第二曲（後書き）

主人公はあまり黒神めだかが好きじゃありません。どちらかと言つと嫌いです。

次の話は時間が思いつきり飛びます。雲仙冥利が不知火に足止めされるちよつと前まで飛びます。

### 第三曲

あれから時間が随分と経った。

部活動対抗水中運動会など出れる訳もなく、観戦していた。いやあ  
く・・・男以外素晴らしかったね。

あちらこちら水着水着・・・天国にいるかと思いました。はい。

そこからまた時間が経ち、遂に雲仙冥利が動く事になった。

刺客を放っているとめだかは言われ、たまたま居合わせた俺に『何故か』足止めしてくれと言い人吉たちを助けに行った。ちなみに不知火は逃げやがった。

そして今俺は

「テメー、そこをどきやがれ！」

「断る」

雲仙の足止め中なのさ！

これは戦闘になるなあ・・・。仕方ないね。ここで貸しを作つとくのもありだろ。

「テメーが俺を止めれるわけ無いだろ！さっさとそこをどきやがれ  
！！」

「何を言っているのかな君は？君如き、止めるのは容易いのだよ？」

「なら・・・やってみるよ！」

雲仙が腕を振るった。でも残念だったね。俺は今ベクトル変換で俺に触れたモノ全てを『反射』している。

つまり、俺にスーパーボールは当たらないという訳なのだ！！音楽室は酷い事になっているが知ったことではない。

「テメー・・・何故オレの攻撃があ当たらねエ！」

「態々言うつと思っっているのかね？」

「気にイラねー野郎だなあ！！！」

さらにスーパーボールを増やしてくる。ははは、無駄だ無駄だ！  
さて、こっちも反撃してあげるかな。

「おいおい、そんなにポーっとしていると・・・私の攻撃は避けられんよ？」

「テメーの攻撃なんて避ける必要なんガアツ！？」

お？あの服・・・スノーホワイト白虎だっけ？中々な硬度だな。ベクトルで加速したブローを喰らわせたのに体に拳が減り込まなかつたぞ・・・。

「テメエ・・・マジで潰す！」

「残念ながら、私は潰されないよ。そして、逆に君が生徒会長に潰されるのが落ちさ」

「・・・殺す殺す殺す！原型を留めねえぐらいにサツリクしてやるよ！！！」

「無理な相談だな」

「無理じゃねえ！強制d「プルルルルル」ああ！？なんだ！！！」

あーら、電話かかってきちゃったか。折角『復讐劇』を発動しようと思っただのにな・・・。

「ああ？任務失敗？どいつがよ！？全員！？マジかよ・・・オレも梃子摺ってるのによお。ケケケ・・・あのバケモン女も目の前に居るバケモン男もどんだだけバケモンなら気が済むんだよ」

おや？化け物認定されちゃったな。



でも俺以上の化け物なんてその内現れるだろ。って、アイツ携帯壊しやがった。勿体無いな。

「気にいらねえ女だな！そこまでイカレたモノホンの聖者だってんならゲーム感覚で殺戮してやるよ！！つーわけでソコをドケ！！」

「了解」

「・・・ハア！？何んでいとも簡単に退くんだよ！？」

「何故って、私は生徒会長に『足止め』を任されただけだ。そしてその役目はもう果たした。だから道を空けるのさ」

「ヘッ！そうかよ！なら行かせてもらっぜ」

さて、俺はもうここに居る必要はないな。後は雲仙に任せて観戦しときましようかね。

となれば善は急げだ。グラウンドに行つていい席を確保しなければ！

――グラウンド――

あの後、雲仙と黒神が戦い校舎が大破した。あれって弁償するのか・・・？

そして黒神のパンチってどうなってるの？俺の全力ではないとはいえ、ベクトル操作で威力が増したブローでも体に減り込まなかったのに、乱神モードのパンチで減り込むって・・・あれ？俺って最強じゃないの？って一瞬思ってしまったじゃないか！

さて、これで一先ず一件落着かな？次は・・・ああ、フラスコ計画を潰すために地下に行くんだったな。

と、言つても一緒に行くことは出来ないからな。うむむ、隠れていくしかないか。

フラスコ計画を潰したら・・・げっ！『マイナス過負荷』かよ！

はつきり言つて、くまがわみそぎ球磨川袂に勝てる気がしないんだが？俺と球磨川の『過負荷』の深さは『復讐モード』じゃない限り、あちらの方が

上だ。

死んだことを無かったことにするとかチートも卑怯だろ。俺も死なないから大概卑怯だけどね。

まあ、殺せはしないが負ける気もしないけどな！上にも書いたが勝てる気もしないよ？チキン？チキンでいいさ！

まあいい。さあ、少女（幼女）達の救出劇の始まりだ！

### 第三曲（後書き）

微妙な終わりになってしまった・・・。

## 第四曲

いや、黒神真黒は原作通り変態だね。俺とは変態のベクトルが違うけどな。

え？真黒と会ったのだった？会ってないよ？ただ気配消して観察してただけさ。気配消して便利だね？でもまだまだ未熟な技能だから、恐らくだが黒神めだかには気づかれていただろう。やれやれだ。で、今俺はどこに居るのかと言うと

「よくもめだかちゃんを泣かせたな」

「・・・善吉」

人吉と宗像形むなかたけいの戦いの感動の場面を真黒さん達と観戦している所さ。いや、油断してたね。まさか黒神めだかに尾行しているのがバレるとは・・・。あれから精進したのに・・・。高千穂たかちほにはバレていなかったから、彼女が化け物なんだろうな。いやはや、相手にしたくないね。

「・・・めだかちゃん、ここらでひとつ俺にがんばれって言ってくれねーか？」

「！！・・・がんばれ！！」

「がんばる！！」

おっほ、良い震脚だ。そして上に刺さっていた刀剣類が宗像先輩に落ちてきやがった。あー痛そうだ。

宗像先輩みたいに『殺されない方法』に長けていないと死んでただる。以外と恐ろしいことするよね人吉って。そういう所が割と気に入ってるんだがな。だが、殺し合いをした相手を友達とするのは甘い。相手がもし復讐心をもっていたら？今回は良いが、次回からは

注意をしてみるかな。無駄だと思うが。しかし、その甘さは嫌いじゃない。

あれ？考え事してたら皆に置いてかれた！？

「待ってー！」

俺って地味なのかな・・・？

ー地下三階ー

「・・・動物園・・・か？」

地下三階も原作通り、動物園だった。動物といえば俺が一番好きな動物はハムスターだ。あんな可愛いのに残虐っていうのが萌えるよね？萌えない？そうか・・・。

つて、阿久根高貴あぐねたかひが離れていく！？よし、ここから俺も参戦しようかな。まずは気配を消してつと。よし、これで準備完了だ！

おお、阿久根が名瀬天歌なせあまがに出会った。つかさ、めだかボツクスのキャラって十一組や十三組が多すぎると思うんだ。そんなに優秀な奴を育てたいのかね。

「悪いが関知させてもらうよ。俺達は箱庭学園の生徒会執行部なんだから！」

「ふーん」

「!?!?なっ・・・!?!?」

上から何かが降ってきた。あれは・・・露出胸の古賀こがいたみだー！原作では割と好きなキャラクターの一人だ。少女（幼女）じゃないから容赦はちよつとしないけどな。

おお、阿久根がああ攻撃を防御しやがった。あれは中々防御できな

いだろ。ん？原作知っているのなら防ぐの分かっていただろって？  
いやいや、ここはめだかボックスの世界だけど原作通りに進むとは  
限らないじゃないか。ただでさえ『イレギュラー転生者』の俺がいるんだ。今の  
攻撃で阿久根が死んでいた可能性だってあるわけだ。

「俺はお前に興味があるねえ旧破壊臣！！」

ピッ……ピッ……ゴゴゴゴゴゴ　ガラッ！　ゴゴゴゴ　ドドド  
ドドドドドドド！

『んじゃまーとくとご覧じろ！名瀬（古賀）ちゃんのワクワク実験  
動物ラァーンドー！！』

ああ、動物達がいっぱいだな。こんなにいるんだ。一匹くらい死ぬ  
かもしれない。死なないように加減するけどね。

「たかが動物でこの私を殺せると思っているのかい？『復讐劇』！」

この学園に蔓延る少女（幼女）達の復讐をちよつとだけ動物達の脳  
に放った。すると、動物達全匹が気絶してしまった。

……おい、『復讐劇』を脳にぶつけたのこれが初めてだけだよ・  
……滅茶苦茶ヤベエ！？三人くらいの復讐をぶつけただけで気  
絶するんだぜ？全部ぶつけたら精神が死ぬんじゃないか？……改  
めてチートだなうん。

「き、君は俺達を尾行してた……」

「西川公平だ」

「公平君か……でもどうしてここに？そして何故助けたんだ？」

「一気に質問をするな。まあ答えるが。ここにいたのは偶々居合わ  
せただけさ。そして閉じ込められてしまってね。そしたらあちらの

お嬢さん達が動物達を放つたので、気絶させただけさ。それに・・・  
二対一はどうかと思って」

「そうか・・・助かるよ！」

「どういたしまして」

いや〜、我ながら白々しいね！でも、話してる暇があるなら上にいる古賀いたみに気づけよ！とりあえず蹴りを放ってきたので此方も蹴りを放って相殺しようかね。

「蹴り穿つ！」

某中二の技を拝借させてもらった。だが、ただ単に力任せに使ったので威力がそんなに出てないが。つか・・・滅茶痛え！？ベクトル変換してなかったけどさ、古賀の攻撃ってこんなに痛いのかよ！？

「あらら、相殺されちゃった」

「また真上から！」

「真上からだけじゃないよーん。真下からもだよーん」

阿久根にドンドン攻撃する古賀いたみ。改造だけであんなに動けるようになるのかよ！すごい技術持つてるな・・・名瀬さんよお。

「おいおい、西川だっけ？古賀ちゃんの蹴りを相殺するなんてどんな体の構造してるんだ？解剖してえ〜」

「体はいたって一般イメルさ。ただ、あの蹴りはさすがに痛かったさ」

「痛かったで済む時点で一般じゃねーよ」

「それもそう・・・か！」

俺は名瀬さんにハイキックを放つ。だが・・・

「名瀬ちゃんに何するんだー！」  
「ぬ!？」

おいおい、古賀さんよ。あなたは今阿久根と闘ってましたよね？それを一瞬で名瀬さんの前に来るとは・・・それに俺のベクトル操作した蹴りを軽々と受け止めるなんて、改造すげえ!!

「お返しだー！」  
「残念ながらそうはいかんよ！」

俺は古賀の攻撃を受け流し、古賀の顔面に膝蹴りをかました。そしてそのまま名瀬さんごと壁に減り込ませて・・・チツ！軌道を変えやがった。仕方ない、古賀さんだけでも壁に減り込ませる！

ドゴーーン！

ひどいって？男女平等（少女幼女以外）なんだよ！甘ったれたこと言ってる逆で殺される！殺られる前に殺れだ！

「おいおい、古賀ちゃんは女の子だぞ？顔面を攻撃するなんてひでーなー」

「少女や幼女なら攻撃しないさ。だが、彼女は女性だ。故に顔面を攻撃できるのさ」

「意味不明だな。けどよー、古賀ちゃんはよー、あんな攻撃クrawnのよ」

「にはははは！」  
「なっ!？」

おいおい、壁に減り込んだはずなのに、いつの間にか呆然としていた阿久根の横に移動したんだよ。改造人間舐めてたわ。



「アブノーマル古賀いたみは、改造人間であるっ」

「な・・・こんなっ・・・馬鹿力!？」

「人体改造が俺の趣味だ」

「許容しがたい趣味だな」

人のこと言えないが。

「にやはは！そんな感じがそんなわけでそんな風にー 古賀いたみは『異常』のために、生徒会執行部と戦うのだ」

「・・・俺は平成ライダー派だよ。仮面ライダー龍騎が好きなんだ」

「私は仮面ライダー555（ファイズ）が好きだな」

何か目の前で名瀬さんが王蛇の真似ポーズしているが、気にしないでおう。

「にやはは！ほんじゃー新旧ライダー対決ってことでえ・・・挨拶代わりにライダーキック!!」

「!!!」

うへ、床が崩れちゃった。さて、まずは名瀬さんを救出して・・・と。初めてのくお姫様抱っこ（する側）く。名瀬さんが奇妙な目で見てくるが無視は無視。

さて、そろそろ中盤に当たるかな？よし、『復讐劇』を人間相手に使うときがきたか。あんまり見せたくないけど、阿久根も破壊を見せなければいけないということでお相子だしな。

「フフフ・・・さあ、復讐劇の始まりだ!」

#### 第四曲（後書き）

明けましておめでとございます。いやはや、餅が美味しいですね。ガキ使とかを見て更新遅れました。申し訳ありません！

今日から明々後日まで親戚の人たちが来るので、恐らく更新できません。ご了承ください。  
ではまた！

## 第五曲（前書き）

親戚が帰ったので更新再開です。ですが毎日更新できませんのでご了承ください。

## 第五曲

さて、ここは何階だろうか？原作や空中にいた時間も考えると四階だと思うが・・・？周りを見渡すと手術道具やらベッドやらある。ここで改造しているのだろうか。怖いなあ・・・。

「つかよー、考え事する前に降ろしてくんねーかなー？」  
「ん？ああ、ごめんごめん」

そういえば名瀬さんを抱っこしていたんだっけ。つか、原作だと頭からベッドに落ちたのによく死ななかつたな。自分の体改造してあるのか分からないけど、普通死ぬぜ。ん？古賀さんの姿が見えねえな。ああ、確か

「ライダージャンプ！！」

地下六階まで行っちゃったんだっけ。恐るべき旧ライダーキック。怪物たちも爆発するわけだ。ん？となると爆発しないシヨツ。〇ー達は実は最強なんでは？どうでもいいか。  
つてあつー！！！！？阿久根が古賀さんの膝を破壊しやがった！

「ぎゃあああああああああつー！！？」

うわっ、痛々しい叫び声だ。復讐を手伝っているときはこんな叫び声聞かないからな。大抵恐怖で震えている叫び声しか聞かないから新鮮に感じるぜ。ん？DSだつて？いやいや、全然違つよ！俺はいたつて普通のMさ。

「改心したつー割に結局お前あつちこつち壊しまくりじゃん。俺が思ってるほど、黒神はお前を変えてねーのかな？」  
「いいや、確かに俺は変わったよ。昔は人間を壊せばスカツとしたもんだけどね、今はただただ気分が悪いよ」

おいおい阿久根君よ。古賀さんが復活しとるぞ。話に夢中になることもいいが、回りもちゃんと見なきゃいけねえよ？え？何故そのアドバイスを言っただけあげないのか？男に言う必要は無し！！でも助けてあげるよ。だって阿久根地味に好きだし。

「ライダーチョーツ「吹き飛びたまへ」がつ！？」

「なっ！？」

「あー、そーいやお前もいたんだっけなー」

「落下から助けてあげたのにそれは酷くないかい？」

「しらねーよ」

うわっ、マジひでえ。

「な、何で骨が砕けたのに動けるんだ！」

「あー？古賀ちゃんは複雑骨折程度なら十秒もありや治るんだよ」

「じゅ、十秒！？十秒だつて！！！」

「そゆこと。じゃあ勝ち目の無い高貴くんの実験はもうおしまいだ。『黒髪めだかによつて変えられた阿久根高貴は名瀬天歌によつて変えられた古賀いたみに手も足も出ませんでした。そして後輩の西川公平に助けられてばっかでした』！ある意味面白く、そしてある意味面白くもねえ実験結果だ」

「あはは！そう結論を急ぐなよ名瀬ちゃんとやら！実験に焦りは禁物だぜ？」

「なっ……ま、真黒さん！？」

キターー変態！スカートめくりも完璧すぎる！いやはや・・・素晴らしー！！

「名瀬ちゃんに何してんだこの野郎ーっ！！」

「おおっと！おいおい、何を怒っているんだい？『可愛い女の子（少女幼女）に会ったら何はともあれスカートをめくらなきゃ（求婚しなければ）失礼じゃないか！』」

真黒さんがこつちを向く。そして

『・・・同士よ（ガシッ！）』

固い友情をあらわす為に必要な行為、即ち握手を交わした。

はっはは！俺が生まれてきてから求婚してきた数はもう数え切れないほどだぞ！全部ふられたが・・・。ううっ・・・目から汗が（涙）

「僕は変態だ。パンツをはいた女子がいるならどこにだって現れる  
！！！」

「・・・大抵の女子はパンツをはいてるよ」

「がるる！」

「気をつけてください真黒さん！女子と言ってもこいつら、普通の女子じゃありません」

「あはは！やだなあ阿久根くん。それをいうなら僕や公平くんだって普通の変態じゃない」

はっ？何かいきなり変なフリをしてきたんだけど？次の台詞に乗れと？。・・・よかろう。

『ノーマルであろうとアブノーマルであろうと僕の前に立つ女子は（私の前に現れる少女幼女に）四つものを奪われる。まず「目を

奪われ」「ブラジャー（嗅覚）を奪われ」「パンツ（妄想）を奪われ」そして最後に「心を奪われる」。『異常』<sup>アブノーマル</sup>にして『変態』<sup>アブノーマル</sup>！」  
「僕こそが箱庭学園旧校舎管理人黒神真黒だ！」  
「私こそが箱庭学園一年一組所属西川公平さ！」  
『以後お見知りおきを！！』

決まったああああああ！これ以上ないくらいに決まったあー  
ー！ー！ー！ああ！？名瀬さん達が引いてる……。まあいい。

「僕は全ての女子を自分の妹だと思っている。否！小学生までなら男子だつて妹だ！！」

いやいや！嘘だからってシヨタok宣言はまずいつて！そこまで変態にはオチたくねえぞ！でもたまに男の娘ならありかなつて思うんだが・・・ハッ！？末期！？まあいいか。所詮オチている人生だ。これ以上オチても大丈夫だ。うん、大丈夫・・・だといいなあ。

「もしも僕が君より下だつたなら！ノーブラというのが本当かどうか確認させてもらう！！」

「・・・いいだろう。ありえねー話だがあんたが俺より上ならばストリップでも何でもして好きなだけ確認させてやるさ」

「オツケー勝負成立だ。じゃ！休憩終了だ。バトル再開！西川くん頑張つて！」

・・・はっ？

「さてさて、鬪うのは阿久根先輩じゃないのかい？」

「いやいや、君であつてるよ。どう見てもこの中じゃ・・・いや、この学園の中で一番強いだろ？」

「・・・」

おいおい、たった二回会ったのとさっきの戦闘だけで分かったのか？恐ろしいなあ。いや、ホント恐ろしいなあ……。

「仕方ない、私が闘おう」

「うんうん、それでこそ同士だ！」

「ふっ、任せ」名瀬ちゃんのヌードがかかっちゃったからね、もう手加減は出来ないよ」ん？・・・あ」

あらら、ベクトル変換すんの忘れていた。つか三角締めとかあんだ殺す気か！でも胸の感触が素晴らしいから許そう。

さて・・・うん・・・これにしようかな。『アベンジタイム復讐劇』発動！  
さあ、復讐劇の始まりだ！

「俺の作った改造人間古賀ちゃんの脚力で首を絞められたらよー。意識なんか一瞬で「グシャア」あ？」

「ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいつ！  
！？」

「な！？」

目の前で古賀さんが痛みで悶えている。おいおい、たかが足を切り潰したただけだぞ。それなのに何故驚愕しているんだ？ああ、そうか。今の俺の姿は

「おいおい、おまえはどここのバケモンだよ・・・」

「ははは・・・これはさすがに予想外だったよ・・・」

「余はバケモノではないぞ。余は・・・復讐者である！！！」

140cmあるかないかの幼女だからだ！



## 第五曲（後書き）

嗅覚というのは少女幼女を探すためのセンサーだと思ってください。最後の幼女に変わったのは、その幼女に『なりきる』ためです。決して主人公が幼女になりたいわけではないです。

## 第六曲

むふふ、この幼女は中々強いぞー。何せ俺の身体能力と比較してみたら、幼女の方が高かったんだ……。神様よ、絶対手を抜いただろ！でもいいもんね！！ベクトル変換使えば俺のほうが上だから（負け惜しみ）。

「さて、余はこの余興を早く終わらせて優雅に復讐して虐殺しに行きたいのだが……。だがその前に……。黒神真黒よ。いつの間にもズボンズボンを脱いだのだ？」

「いつの間につて……。西川くんが変身したと同時に脱いだんだよ」「ほう、余が目で追いきれないとは……。素晴らしい。それと名瀬とやらよ、古賀とやらがこの調子だ。だから貴様も脱げ」

「……。意味わかんねーが、しょーがねーな。一枚脱いでやるよ」「な……。なにいー！？必要も無いのに脱いだだとおーいーいーっ！？」

「うるさい」

「へぶっ！？」

この幼女の喋り方って偉そうだよな？どこかのお姫様らしいんだが……。詳しいことは実際に合わないとは分らん。つか、幼女なのにこの喋り方はこれいかに。あれか？ギャップ萌えってやつか？いいじゃないの！

そしてこうやって話している間も古賀さんを蹴りまくっている。いや、本当はこんな酷いことしたくないんだよ？でもこの幼女の『異常』が『虐待』カースブラッドっていう『異常』なんだ。何か虐めて虐めて血が出るとさらに虐めたくなる体質らしい。そうこうしていく内に身体能力も上昇するというドラな『異常』なのさ。で、体が勝手に蹴ってるんだよね。酷いけど素晴らしいね。

・・・よし、この異常（外見も）は気に入ったから登録しよう。

「はっ！規格外もいーとこだな西川くんよ。抱きたいくらいだぜ」

「余を抱くということは死にたいと思っっているのだな？死んだら余を抱く権利を与えてやってもよいがな」

なにこの会話の噛み合って無さ。そして抱きたいから死にたいというのは結局抱けないのでは？どうでもいいんだけどね。

「は？思ってねーよ」

「なら余の欲の為に死ね」

「ちよ！？さすがに殺しはだはっ！？」

足元にいる古賀さんを阿久根の方に蹴り飛ばす。そしてそのまま腰に差してある短剣で名瀬さんを・・・ブスリといこうか。

「喰らうがいい！」

「名瀬ちゃんには指一本触れさせないよ！！」

「ぬう！？」

ちよっ！？古賀さんよ、阿久根と一緒に吹っ飛んでいったのではなかったのか？まさか・・・これが愛ってやつか？愛の前ではどんな壁も乗り越えられると言われているし・・・。

「余の邪魔をするな！だから・・・ここで疲れ果てる！」

「えっ！？」

首を掴み地面に押し付ける。古賀がじたばたしているがどうでもいい。原作だと阿久根が疲れさせて勝利しているし、この幼女ボディーじゃ古賀さん相手に縦四方固めなんて出来るはずもないし、やり

方すら知らん。だからこのまま押し付けて疲れさせる！  
因みに、殺すとか言っていたのは演技だよ。さすがに女性は殺せないさ。え？男性は？・・・フフフ。

「余の思った通り、キサマの弱点は疲労だな」

「！！？」

「抵抗したって無駄だ。余の力はキサマの力を遙かに上回っている」  
いや、ホントこの少女は身体能力はチートだね。これくらい身体能力はしかったな。そうすれば黒神めだかにも能力使わずに接近戦で勝てるかもしれないのに・・・。球磨川？無理無理。勝てない勝てない。

「いやー西川くんは頭良いね。さてと、名瀬ちゃん」

「なんだよ」

「ご覧の通り、僕の上に立とうなんて百年早いよ」

「いやいや、おまえは何もしてねーじゃんかよ」

「いやいや。ほら、僕は阿久根くんが戦う代わりに西川くんを戦わせたじゃないか。その時点で君の『改造』<sup>アブノーマル</sup>は僕の『解析』<sup>アブノーマル</sup>に負けていたのさ」

「・・・意味わかんねーぜ」

「ごもつともだな。そして意味わかんねーぜって言ってる割には脱ぐうとしてるアナタの方が意味わかんねーよ。」

「おおつと名瀬ちゃん。セーラーブラウスはまだ脱がなくて良いよ。それよりも先にその覆面を脱いでもらおうかな！」

「！？」

「ノーブラ確認を諦めてもいいくらい僕はきみの覆面の下に興味がある。ルールはルールだ、従わなきゃ。それとも、このまま友達」

エネルギー切れを待つかな？」

確かに俺も興味がある。原作だと目が死んでいたが、現実だとどうだろう？恐らくだが現実も目が死んでいるだろう。いや、あの目は治らないだろ。どちらにしろ俺はこれ以上彼女達を攻撃したくない。だって精神的に疲れるんだもん。

「な、名瀬ちゃん！こんな奴の言うこときく必要ないって！私のことなら心配しないで！！」

おいおい、首を絞められているのによく声が出せるな。これも改造のおかげか？

「……………ああ、もちろん心配なんかしねーよ古賀ちゃん。だけれどごめんな。俺は友達が大事だ」

「な……………名瀬ちゃん……………」

「なんだ知らなかったのかよ。みんなからいじめられてた俺に古賀ちゃんが声をかけてくれた時、俺は、すげー嬉しかったんだぜ」

「!?!?」

ついに包帯を取るか。さてさて、俺も能力を止めようかな。あー、今日は徹夜だな。いや、オールかもしれない……………。なんかこの幼女「全員殺すまで余の復讐は終わらない！」とか言いそうだし。おっ、包帯を全部取った……………ほう、やはり美人だな。黒神めだかにも似ているし。あと目が死んでる。うん、それだけだな。少女幼女の魅力には流石に勝てなかったか。勝つ方がおかしいんだけどね。

「……………ケツ！だからイヤなんだよなーこの顔は！みんなこぞってそういう目で見やがる。目立って目立ってしょうがねえ！あ

「もう、超恥ずかしいぜ!!」

「恥ずかしいのかな？恥ずかしがる必要も無いのに……。でも恥ずかしい感性は必要だよ。ほら、恥ずかしがっている少女幼女見るところ……。心の奥から言葉では表現できない何かが入り込んできて来るんだよね。これがいわゆる r r y」

「……。スカートを穿きなさい名瀬ちゃん。女の子が腰を冷やすものじゃないよ」

「……。てめーで脱がしといて何言っただよ。穿かしてーならまずあなたが先にズボン穿きな」

「ああ……。そうだね。そうしよう」

「……。フン、なんだよ、いきなりサガっちゃって気持ち悪い。あんな、難しいゲークリアしたら喜ぶんじゃないか？脱力するクチか？勝ち負けじゃなく過程しか楽しめねー奴っつーかよー？ま、どーでもいいけどな。おい、高貴くん。いい加減古賀ちゃんを解放してやってくんねーか？いつまでもその絵画だとお前が変態みてーだぜ」

確かに。知らない人が見たら女性に襲いかかっている風に見えるからな。襲うのはいかんよ流石に。襲われるのは構わんが。

「じゃーな高貴くん。それに変態の魔法使いさんに規格外の西川くん。お仲間と合流してさつさと下に行きなよ。もつとも、ここから階下はただの地獄だね」

「……。待ちなよ名瀬ちゃん。逃げるのかい？」

「逃げる？何言っただよ、帰るだけだよ」

「いいや、君は逃げるんだよ名瀬ちゃん。いや　名瀬ちゃんじゃあないな。『黒神くじら』それが、お前の本当の名前だ」

さて、もうそろそろ黒神めだかがやってくるだろう。ハッキリ言っ

て邪魔だ。邪魔すぎる。でも来ない可能性もある。さて、運命の天秤はどちらに傾くかな？俺的には邪魔だが来てほしい。

ん？毛嫌いしてるのに来てほしいってデレたかって？違うね！あんな奴にはデレねーよ！！

理由は、俺は力を温存したいからだな。何故って？それは何れ分る事さ。

さあ、天秤に運命を託そうか！

## 第七曲

突然だが今黒神くじらの復讐の念を読んでいる最中だ。

いやあ、恵まれた人生というのは俺も嫌だが、地獄の人生というのも嫌だよ。普通が一番さ、普通が。

でも故意で記憶が無くなっているんだよな？それなら真黒さんの説得とか効かないわけだよな？ハハハ、ドンマイ真黒さん。

「僕の妹は世界中探したつてめだかちゃんとかくじらちゃんだけだよ。お兄ちゃんにはただふたり、妹達がいればそれでいい。六年間お前のことを忘れた日は一日だってなかった。さあ振り向いて、その可愛い顔をよく見せておくれ。不幸はもう十分味わっただろう？お前だって少しくらいは幸せになっていいんだよ」

「……お兄ちゃんっ……」

ああ、あの雰囲気は嘘泣きだ。何故分かるかって？数々の泣き顔を見てきた俺にあの程度の嘘泣きを見破れないはずが無いだろう？

「!!なっ……え……!!?」

「……いや別によ、あんたの話を疑うわけじゃねーんだ。たぶん、それは本当の話なんだと思うよ。だけどごめんトラウマな。そういう幸福な記憶おもいでを俺は心ん中改造して消したんだわ。俺は家を出て、名を捨て、顔を隠し、記憶を消した。俺の人生は六年前から始まったのさ」

……長い、長すぎる。いや、別に長くてもいいんだけどさ。くじらの今の生い立ちなんて聞いてないから、話されても困るんだが……。仕方ない、もうちょっとだけ聞いてやろうかな。

「俺を幸せにしようなんて奴はお呼びじゃねーんだよ見知らぬ人。」



大親友の古賀ちゃんみてーに俺と一緒に不幸になっしてくれるっつーなら話は別だがね。しかし納得はいつたぜ！妙にあんたにム力つく理由とか、顔をあんま見られたくなかった理由とかなー。なるほど、これが無意識って奴かよ」

「そんなことはいい！それより今真黒さんに何を注射した！？」

「さー、なんだろうねー。わっかんねーけど。まーでも確かに言うることがひとつだけあるぜ。自称肉親のこいつをぶっ潰せば俺は更に不幸になれる！つまり、もっとすげえ異常ものを生み出せるってことだよな！いいだろう！気が変わったぜ　　フラスコ計画続行だ！

「！」

ドガアッ！！

『！？』

「さて、気のせいかと思ったが確認に駆けつけたぞ。黒神くじらという素敵な名前が聞こえた場所はここかな？・・・あ、くじ姉だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おー、きたよ。やはりこのイベントは起きるのね。まあ、このイベントがないと黒神めだかが強くないなあ。

そして二人が並べば似てるのが一目瞭然だね。そして全然喋らない俺は空気なのね・・・（涙）

って、あ！酷っ！？実の姉を容赦なく叩きやがった。あれかな？愛の鉄拳（違うと思う）ってやつかな。いやはや、美しき姉妹愛（一方的な）だ。

「教えてくださいお姉さま。これはどういった毒なのですか？」

「毒？いやいや違うねえ、実に心外だ。それは薬だよ。『ノーマライズ・リキッド』！異常おれたちの異常を『病気』とみなした特効薬。言うアブノーマル

なら異常殺しのワケチンだ」

へー、じゃああれを飲ませたら『異常』相手なら誰にも勝てるね。俺には勝てんぞ？だって即効分解して効果を無くすからな。いやあ、こんな所でチートがあってもなあ・・・、あんまり使わないな。欠点もあるし。欠点？あれだ。腹がすぐ減るんだよ。そのセイで俺の財布は万年氷河期だ。酷いと思わないか？父さんも母さんも俺に対しては敵しいのに、妹に対してだと激甘なんだ。小遣いが俺が5千（これでも割ともらっている方だと思う）なのに妹は二万だぞ？なんだよこの四倍の差はよお！！妹なんて可愛そうだってコンビ二のフライドチキンを奢ってくれるんだ。優しいね、優し過ぎて泣ける。いい子に育ったもんだ。俺の物を勝手に持っていくというのはいただけないが。

「わかりました。私が実験台になりましょう」  
「！！！」

んあ？ああ！？妹の愚痴を書いていたらいつの間にか注射刺してやがった！？

「ふむ、なるほど。これは確かに痛い」

あらら、倒れちゃった。くじらにいたっては家族を解剖する気満々だし。阿久根は阿久根で約束が違うとか言ってるし。いやいや、馬鹿じゃないのか？どこに敵との約束を守る馬鹿が黒神めだか以外にいるんだよ。これは謂わば殺し合いと等しいんだぞ？約束する方がおかしいっての。

「古賀さん！君は名瀬さんの友達なんだろう！！そう言ってたよな！だったら彼女の暴拳を止めてやれよ！！！」

「・・・友達か。確かにそうだね。だけど友達は、タノシコトだけじゃなくって、ヤナコトも一緒にするから友達なんだ!!ぶっちゃけマジでドン引きだけど!それでも私は名瀬ちゃん友達だ!!」

「・・・」

オイイイイ!?阿久根よ!何故俺には助けの声をかけない!絶対俺がいること忘れてるだろ!!  
まあ、それは置いて。

俺的にはさ、楽しいことも嫌なことも一緒にするから友達って言ってるけどさ?それって親友って言うんじゃないのか?友達止まりじやそこまで一緒には出来ないだろ。そんなだけだよ。ツッコミをしたかったんだよ。ツッコミタカッタンダヨ!!

つておお!?薬打った状態で黒神めだかが古賀さんを吹っ飛ばした。  
・・・バケモンだな。

「・・・他人の不幸なやみごとを解決する目安箱めだかボックスねえ。どうせ地下こじにも生徒の依頼で来たんだろうなあ。ハハ、きよーだいでこんなにちぐはぐなもんかよ」

「・・・?」

「おっけー降参だ、自称妹。負け負け!俺達の負けだよ、ごめんなさーい。ほれ解毒剤だよ。この通り二人分くれてやるから許してね」

いやいや、明らかに芝居だろあれ!どーせまたなんかの実験しようとしてるんだろ。あーあ、やだやだ。

「・・・受け取ってはいけませんめだかさん!異常あじうらは降参なんてしない!十中八九!それは解毒剤ではない、別の毒薬です!!」

「・・・と、お前の愛すべき友人が言ってるけどよ。どうす

る？お前は俺の言葉を疑うかい？」  
「信じます」

「・・・アホだ。アホが目の前にいるよバーニイ！いやいやいや、さつきもそうだったけど、普通敵に渡された物なんて使んだろ。何考えてんの分かんねー！」

「めっ・・・めだかさん！なんてことを！彼女には騙されたばかりじゃないですか！！あなたはいつもそうだ！誰の言うことでも簡単に鵜呑みにして・・・一体、何回騙されたら気が済むんです！！」  
「・・・阿久根書記、貴様の言うこともまあわからんではないが、たとえば百億人から一兆回騙されたところで、私は好きな人を疑ったりしないよ」

「・・・ハッ、反吐が出るね。やっぱり俺は黒神めだかのことが生理的に無理らしい。嫌いではないんだが・・・」  
しかし、自分の身を犠牲にしてまで疑ったりしないのは間違いなんじゃないかな？まあ、本人が決めていることだから言ったところで聞かないと思うがな。

「今のアンブルはなんだいくじらちゃん。あれは僕も初めて見る薬品だったぞ」

「わかんねーならお得意の解析をすりゃいいんじゃないか。あ、そっか。今はできねーんだっけ。じゃあ親切にも教えてやるよ。なーに、今度はそれほど異常な薬じゃねえ。心療内科とかで普通に処方されてる普通の薬だぜ」

「！！大丈夫ですかめだかさんっ！！」  
「うむ、大丈夫だ。心配要らぬ　ところでここはどこで、私は誰で、何のために生まれてきた？」

あらら、記憶が消されちゃったな。まっ、自業自得だしドーデもい  
いんだけどね。問題はこの後に起こることか……。面倒だがやる  
しかないね。最悪……。殺されるかもな。殺されんように努力しま  
すかね！

さあ、第一章のフィナーレといこうか……。！

## 第七曲（後書き）

この物語はフィクションです。実在の話はございません。  
なんと主人公が喋らなかったこのお話。ですが、次回はバンバン喋りますので。

## 第八曲

あの後、記憶が無くなった黒神めだか（馬鹿）は古賀さんに一方的にボコられた。それはもう見事にボコられていた。

そして助けようとした阿久根も同じくボコられた。

俺？一回だけ向かってきたが返り討ちにしたら向かってこんくなつた。あはは、寂しいなあ！

「で、あんたは向かってこねーわけ？仲間がやられてる時も手を出さなかつたしなー」

「ハッ！そこにいる馬鹿が勝手に突っ込んできて自滅しただけだろう？そして、私はそこにいる馬鹿はあまり好きではない。その馬鹿を改造しようがしまいが、私には全然関係ない事だからね。故に手出ししないのだよ。まあ、その馬鹿が少女幼女だったら助けてやったがね・・・」

「そーかよ。今はその『性癖』に感謝しとこーかな。もうあんたとは二度と戦いたくねーし。さて、そうと決まれば善は急げだ。ばいばーい、大好きなお兄ちゃん」

「！！」

ここも原作通り穴から飛び降りたか。でもさ、古賀さんが名瀬さんの首根っこ持ちながら降りてつただけどさ・・・死ぬよね？怖っ！？

「おい！西川くん！！」

「ん？」

「何故めだかさんを助けなかった！あの時めだかさんを助けていたら改造なんてされずに済むんだぞ！！」

「・・・で？それがどうかしたのかい？別にあの馬鹿がどうなるう

が私には関係のない事」

「なっ！？君は本当にそう思ってるのか！？」

「ああ、あの馬鹿が自滅したただだからね。それを何故俺が尻拭いしなければならぬ？おかしいよなあ？俺が生徒会のメンバーだったら分るがよお、全然関係ない俺に尻拭いを押しつける時点で終わってるんだよ！それになあ、俺にも目的があるから共闘したが、もし俺の目的の邪魔をしていたらアンタをぶっ殺してたぞ」

「クッ！この・・・！！」

「やめるんだ阿久根くん！」

「真黒さん・・・」

「残念だけど、西川くんの言ってる事は本当のことだ。それは仕方ない。だが今はそんな事で争っている場合じゃないよ。一先ず善吉くんと合流しよう」

「・・・そうですね」

たくよー・・・俺に怒鳴った処で意味が無いのによあ・・・。はあ、メンドクサイ奴だ。大体、今ここで体力消耗したら計画が狂う。それだけは駄目だ。

さて、人吉の処に行くかな。早く行かないとまた置いて行かれるしな。

――人吉と合流――

今阿久根と人吉が喧嘩中・・・いやいや、阿久根最低だろ。人吉が生徒会執行部として責務を果たそうとしてるのに、阿久根は黒神めだかのことばかり。そして人吉に論破されてもまだ諦めきれない様子・・・黙らすか？こう、一瞬で気絶させればいける！



「・・・ケツ！相変わらずだなテメーらは、この戦況でも助けることばかりで！ちよつとは助けてもらおうとか思わねーのかよ？」

「えっ・・・！？なんであんだ達がここに・・・！？」

「いやなに、大事な後輩が困つとるゆーて不知火ちゃんに教えてもーて、おつとり刀で駆けつけたちゅーわけやん」

「907868676478088665」

「俺とか的にはあれか？そんな弱い奴らに負けた覚えはない。お前たちを倒すのはこの俺　か？」

「それを言ったら僕たちは全員生徒会に負けてるだろ。普通に友達を助けたいでいいんだよ」

「ケケケ！まあ理由とか御託とかいーだろうが！まずはカツチヨヨク登場シーンを決めさせるや」

『負け犬軍団参上！！』

あれ・・・？鬼瀬さんがいない。ええええええええ！？ここで原作とちよつと違う感じになったと・・・？ああ・・・なるほど。鬼瀬さんポジシヨンに俺が入れと。

フフフ・・・ちよつと計画がやりやすくなつたかな。嬉しい誤算だ。つまり運が俺に向いてきたってわけだ！ヒヤッホー！ウ！！

「自分のために誰かが傷ついたら、めだかちゃんは絶対に泣くんだよ！俺はもう二度と、めだかちゃんが泣くところなんて見たくない・・・」

あれ・・・？いつの間にかここまで進んだ？あれか？俺が喜んでいたら？別にいいか。

「ケツ、テメーが泣いてんじやねーかよボケ！」

「・・・ちゅーか盛り上がつてるとこ水さして悪いんやけど、地下十三階まで直通のエレベーターが入り口んところにあつたやん。あれ

使たらあかんの？」

流石卑怯王だ。誰もが考えることだが言っではいけないと思っている。それを遠慮なく言うその素晴らしさ。5点(50点満点中)をあげよう。

——エレベーター前——

ピッ ピッ ピッ ピッ ピッ

「ほーい、パスワード入力完了ー これでエレベーターちゃんすぐ来るぜー」

「すげえ・・・文字制限なしのパスワードをいとも簡単に・・・」  
「いやいや、パスワードなんてどうでもいいんだよ！問題はこの後だ。  
・・・まっ、考えてあるんだけどね。」

「実際、このエレベーターを動かせるのは『十三人<sup>パーティ</sup>』の中にも七人しかいないんだ。つまり、雲仙くんとあとは『裏の六人<sup>プラスチック</sup>』と呼ばれている連中だけなのさ」

「『裏の六人』？」

「うん、いるんだよそういう奴らが。異常度だけに話を限れば僕たちどころか、都城や行橋すら凌駕するトップランカーだ。黒神さんが化け物ならあの六人は魔物だろうね」

「ケケケ！まあそう怯えんなよテメーら。裏の六人だろーが甲賀七忍だろーが、どーせそいつら全員ショートカットできるんだからよー。って！なっ・・・！！？『裏の六人』！！！」

へー、あれが裏の六人か。うーん、確かに異常度はすごいけど敵じゃないね。まあ所詮かませ犬的な立場だし、早々に消えてもらおうかな。5・・・

「雲仙、高千穂、宗像ア！なんでそっち側に立ってんだよ。ひよっとして裏切ったのかお前ら!?」

4・・・

「・・・裏切ったんじゃない、表立っただのさ」

3・・・

「それにお前らと仲間だったつもりはねーよ」

2・・・

「かー！悲しいこと言うねえ！んじゃしょーがねー。敵として！改めて挨拶しとこうかな」

1・・・

「糸s「0だ。早々に消えたまへ」っ!?」

ドガン　グシャッ

チツ、変な執事っぽい奴しか倒せなかったか！ん？殺してないよ？殺してもいいんだがそうすると人吉たちに批難されそうだからね。それは嫌だから。

「人吉、あんたら生徒会は黒神めだかのところまで行け。ここは俺やチーム負け犬に任せろ」

「公平!?何を言って・・・」

「ここに六人来たってことはだ、最下層までほぼガラ空きだ。途中で邪魔が入らなければあんたらが黒神めだかのところまで行くにはギリギリ助けられる」

「馬鹿言うな！あんた達を置いて行くなんてできるわけないだろ！」

「・・・人吉よ。君は俺が負けるんでも思ってたんのか？」

「・・・ああ」

「ハッ！正直だな。だが残念。俺はこんな奴ら楽勝に・・・倒せるんだよ！！」

周りのベクトルを操り、残り五人を地面に押し倒す。

「！？」

「さあ行け生徒会執行部よ！既に物語は終盤に入っている。君たちが迷っている暇などないんだよ！！」

「！！ありがとな公平！それに雲仙先輩たちも！恩に着ます！公平、これが終わったら飯を奢るぜ！！」

「楽しみにしておくよ」

さて、行ったか。あとは目の前で地べたに這い蹲っている『アフノーマル雑魚』を倒すか。

「じゃあなプラスなんたら」

俺が足を振り下ろそうとした瞬間

「！？」

どこからともなくでかい螺子が飛んできた。おいおい、今ので俺以外全滅かよ！雑魚すぎるだろ！！だが今はそんなことどうでもいい。問題は飛んできた螺子だ。この螺子の持ち主は・・・

「・・・チツ」

『道に迷ってフラフラしてたら目の前で十三人が串刺しになっている。そして一人だけこの面白半分の惨状で生きているってことは犯人はソイツに間違いない。そしてその惨状にたまたま居合わせてし

まった僕は運が悪かった。僕が来た時にはこうなっていたんだよ。  
だから　僕は悪くない』

球磨川楔<sup>くまがわみそぎ</sup>・・・登場、展開が早すぎるだろ・・・!!これが原作と  
違うところか・・・。参ったな・・・俺死ぬかも。

## 第八曲（後書き）

投稿遅れて申し訳ありません。リアルが忙しくて時間が・・・。

## 第九曲（前書き）

遅くなって誠に申し訳ありませんでした！

## 第九曲

球磨川楔・・・彼は『過負荷』の能力『大嘘憑き（オールフィクシヨン）』を持っていて。その性能はハツキリ言えば『最強』<sup>チート</sup>だろう。死なない、視力を無くさせる。下手すれば五感全てを無くす事も可能かもしれない。

果たして、西川公平は勝てるのだろうか？

（さて、どうやって闘おうか？前も言った通り、球磨川に勝てる要素が少なすぎる・・・！直死の魔眼とかあればいいんだがあるはずも無い。・・・無理だ！）

『・・・驚いた。初めて会ったよ。まさかこの世に存在するなんてね。なんていうか・・・そう、僕に似てる奴つてのが』

「・・・そうだな。私と君は存在自体が似ている。君は『嘘』、私は『虚構』。全く、愉快で不愉快だ」

『あはは、初対面なのにひどいなー。さて、お互い初対面なので自己紹介しようか。僕の名前は球磨川楔、この箱庭学園の「マイナス十三組」に転校してきたんだ。よろしくねっ』

「私の名前は西川公平。一年一組だ」

『へー、意外だね。君はてつきり僕と同じく転校してきた「マイナス十三組」だと思ったんだけどなー』

「私は普通という名の皮を被った異常者だからな、普段は自分の事を隠しているのさ。それに、目立つのはあまり好きではないからな」

だがあまりにも目立たないから周りからモブキャラ同然の扱いだが目立とうと思えば目立てる、だがあえて目立たないというのが西川らしいと言えば西川らしい。

『うんうん、僕も目立つのはあまり好きじゃないかな。ああそうだ。



公平ちゃんも「マイナス十三組」に入らない？公平ちゃんなら大歓迎なんだけど」

「断る。私は一年一組が気に入っているんだ。今更他所のクラスに移るなど毛頭ない」

『あらら、フられちゃったなー』

「さあ、断られたんだ。早々にどこかに消えたまへ」

『うーん、それもいいんだけど』

球磨川がそういった瞬間、彼の横を螺子が通り過ぎた。いや違う。彼が避けたのだ。しかも無意識に。

しかし

（あぶな！？反射をONにしてるから向かってきてもいいが、横をギリギリ狙うのは止めてほしい！！）

本人はその事に全く気づいていなかった・・・。

『僕は道に迷ったんだ。道案内でも頼もつかない？』

「・・・ハッ！受けようじゃないか・・・！」

『よろスッ！？』

球磨川の前に一瞬で移動する彼。

ベクトル変換＋身体能力＝瞬間移動もどきができるという技？だ。そして

「死にたまへ！」

球磨川の体に指を突き刺した。その瞬間、球磨川の体が風船の様に破裂した。血が降り注ぐ中彼は油断などしていなかった。それは問題が一つだけあるからだ。問題は

『僕を殺すなんてひどいなー。それに殺し方もグロいし、これがジャ○プだったら規制されてるよ?』

「死んでないからいいだろう?それに、ジャ○プじゃないからいいだろう?」

最初に書いた通り、死なないという事だ。だがこのまま放っておいても無駄だ。だから彼は首を掴んで握り潰した。

(たく・・・死んでも蘇るなんてどうすりゃ勝てるんだ?勝てる見込みがねえーんだけど。俺の能力じゃ不死殺しを持つてる少女幼女なんていないしなあ・・・。それに球磨川の再生は『大嘘憑き』によるモノだからな。不死殺しが効くとも思えない。・・・どうしろと?)

『すごい握力だなー。僕は非力だからリングゴすら潰せないんだよ?ああ、でもそれだとリングゴがもつたいたいね』

「下らぬ話をしている暇があるなら、自分の身を心配したらどうかね?」

『僕はいつも自分の身を心配してるよ?』

「そうかい!」

ベクトル変換でまた血を逆流させようとする。しかし

(ベクトル変換!・・・あれ?ベクトル変換が出来ない!?・・・どういうことだ?考えられるのは・・・)

ベクトル変換が使えなくなっていた。その理由は

「テメエ・・・何やった・・・?」

『おや?口調が変わったねー。それが素なんだ。ふーん、大して面

白くもないね。温厚そうな人がキれたらそうなるかのような口調だね。それに僕が何やったって？しーらない。ほら！僕って普通だからさ」

「・・・ハッ！まあ、大方目星はついてんだよ。テメエの能力によるモノだろ？胡散臭い能力持ちやがって」

『胡散臭いのはお互い様じゃないかなあー？まあでもせいはい！そうそう、僕の能力で君の能力を消したんだよ。何の能力かは分かんかったけどね』

「ご丁寧に答えてくれてありがとよ」

球磨川が能力で消してしまったからだ。

しかし、彼は球磨川の腹をおもいつきり蹴った。一般人が蹴っても大した威力は出ないだろう。だがベクトル変換が使えなくても、身体能力は普通ではありえないくらいになってるからその威力も計り知れないモノになっていることだろう。

（しかし、能力を使えなくするのは反則だろ・・・。原作よりも強いんじゃないか？ここで計画が一瞬で崩れ去るとは・・・はあ、鬱だ）

『痛た・・・。思っていたより威力が少ないのは驚いたよ。やはり君は身体能力に関係する能力だったんだね』

「違うね。テメエじゃあ一生かかっても辿りつけねえ能力だ」

『ふーん、辿りつけない・・・か。うん、そうだよ。多分僕だと一生かかっても分からないと思うよ。でも 能力を失った今関係ないよね』

球磨川がそう言った瞬間、彼目掛けて螺子が数本投げられた。しかし、彼はそれを避ける。当然だ、能力が使えないのだから。

(チツ！まじ面倒だ。勝機が一向に見つからん。脳をフル回転させてはいるが出てくる答えは後退の文字のみ。だが　　)  
「引き下がるわけにはいかねんだよ！」

すぐさま近づいて球磨川の顔面、後頭部、腹・・・様々なところを殴る、蹴る、引き裂く等、残虐な殺し方も交えて殺しまくる。だが

『いやー、こんなに殺されたのは初めてだよ。中々体験できない殺され方もしちゃったしね』

「・・・この化物が」

球磨川は死なない。

(まじでやばいな・・・。流石に疲れてきた。全く・・・俺よ、何が最強だ、何がチートだ。俺の考え・・・願いはたった一人の存在にすら勝てない儂い願いだっただのか・・・？いや、違うね。奥の手はある。だが・・・それすら使っても確実に殺せないし、まだ使えない。後二人・・・『嫉妬』と『憤怒』さえ埋めれば使えるんだ・・・！くつ、万策尽きたか？)

『化物ってひどいなー、僕が化物だったら公平ちゃんは狂人じゃないか。僕を何回も殺して平気そうな顔して・・・、僕が今まであつた中でも公平ちゃんが一番「狂人」<sup>アフノーマル</sup>だと思っよ』

「『狂人』・・・ね。ああ、確かに俺は狂ってる。油断すればそこらにいる奴らに復讐したくなるほど狂ってる。だがなあ、いくら狂人だからってなあ、俺は他の狂人と違うところがある。それは・・・俺は希望に突き進んでいるだけ。そして少女や幼女を守るが為に復讐していることだ！」

『・・・なーんだ、そんなことか。僕には復讐とか希望とか分らないー復讐したいと思っただこともないしー、希望を持ったことも

ないしー。ハッキリ言っつてそんな感情なんて気色悪いだけでしょ？  
そんな公平ちゃんにプレゼント。』

「……ッ!？」

(ぐっ、急に目の前が真っ暗になりやがった!?クソツタレ!最悪だ!視力も無くしてきか……。これで勝つのが不可能から絶望に変わりやがった。だが……。それでも闘うしかねえ!)

『気に入ってくれたかな?』

「……いいねえ、いいねえ、気に入ったよこの野郎!!」

投げている螺子の量が段々と増えている。視力もなくなりだんだんと苦しくなっていく彼だが、勝機を逃さないようにしている。だがそれは徒労に終わってしまう……。

「テメエがもう嫌だと言うまで殺してやるよ!」

(このまま殺し尽くすしかない!そうすれば人吉達が来てこの戦いは一旦終わりだ。引き分けなのは惜しいが、この際負けなければ何でもいい。さあ……。死ねッ!?)

彼が球磨川を一方的に虐殺しようとした瞬間、足が何かに躓いた。  
その何かとは

『残念だけどここでお別れだね。ああ、公平ちゃんの周りに倒れた  
り礫にされてる人たちは生き返らせるから大丈夫だから安心しなよ。  
でも、公平ちゃんは生き返らせないから……。さよなら。』

「……チクシヨオ」

序盤でやられたメンバーだった……。

そして彼はそのまま螺子が頭に刺さりエレベータの上に突き刺さった。さらに球磨川は彼目掛けて螺子を数本投げた。彼は避けれるはずもなく、全て命中し……。絶命した。

果たして・・・彼は助かるのだろうか？それは神のみぞ知る・・・。

## 第十曲

周りは闇、足元は水、ここはどこなのだろうか？ああ、俺は死んだのか。不老不死が死ぬのも可笑しな話だが、その不老不死という概念自体を消されたのだろう。全く、厄介な奴だ。

「本当に厄介な人間だったね。あの能力は人が持つ許容を軽く超えてしまっている。だが所詮人の身、この世にこれるのは私と・・・君のみだ」

よう、神様。またあつたな。

「はあ、何回言えば気が済むのかな？私は神ではないと」

何だっていいさ、俺に第二の人生をくれた存在だ。神様以外なにがあるというんだ？

「・・・そうかい、まあ思つのは君の自由だ。それを直させる権利など私にはないからね」

まあ、そんな話はどうでもいいんだ。問題は

「どうして君をここに呼んだのか・・・だろう？」

・・・ああ。

「それは至って簡単な理由だ。君はあそこで死んでいいような人間ではないからだよ」

死んでいいような人間ではない？それってどういう事だよ？

「君が腐った人間ならここまでする義理が無いのだが、君は私と瓜二つな性質を持っているそれは」

復讐心・・・だろ？

「ああ、そうだ。君と私は復讐という名の鎖で繋がっている。そして君がこのまま死んでしまったら私のような人間になりかねない。ということ君をここに呼んだのだよ」

なるほど。

「さて、君は今すぐ戻ってもまた返り討ちだ。そして視力は回復させれるけどベクトル変換は完全回復無理だね」

何故？

「君の能力じゃないからだよ。この能力は一方通行しか使えないモノだ。それを君という枠に無理やりはめ込んで使えるようにしたんだ。ほら、黒い翼とか出そうと思ってても出せなかつただろう？」

出せなかつたのはそういうことだったんか・・・。ん？完全には無理って事は、断片的には使えるってことだよな？

「そうだね。まあ、使えるとしても自分自身の運動ベクトルしか操れないが・・・」

具体的にはどんな風に扱える？



「跳、蹴る、殴る時のベクトルを操ることぐらいしか出来ないよ。反射とかは無理だね」

・・・戻っても即効殺されそうだな。

「そう、だから他の者には使えない、君だけのとある能力をあげよう」

マジで！？ええええええええ！？マジかよおおおおお！！やったああああああああ！！

「落ち着きたまへ」

うえ！？ああ・・・ごめんなさい。

「気にしてないよ。さて、君の能力なんだが・・・一つ方法があるんだ」

どんな方法だ？

「それは君の脳自体のレベル5になれる可能性を引っ張りだすのさ」

それは・・・痛そうだな。

「痛いだろうね。激痛が走るだろう。だがそれを乗り越えれば君オリジナルの力を手に入れることができる」

そうか、ならやってくれ。

「了解」

ん？なんだか手足が痺れて……。うがあああああああああああああああ  
あああつあああああつあああああああああつあああああああくあ  
w s e r f t g y ぶじこi p

時間で表すと一週間後

がああ……。はああああ……。ゴホツ！？ああ……。血がマジ  
イ……。だが、痛みが消えたぞ……

「おめでとう、これで君も君自身の能力を身につけたよ。さてその  
能力は……。ふむ、これまた人の身に余る能力だね」

……。俺の能力は何なんだ。

「それは原子に関わる事柄を司る能力だ」

原子ってというと元素の最小単位……。だっけ。

「ああ、そしてその元素すら操れる……。いや、創れるのだよ」

それってすごいのか？

「君は馬鹿か？すごいに決まってるだろう。つまり、自分の目の前  
で核融合を起こせても不思議じゃない能力だ」

……。それは凄すぎるだろ！？ん？ってことは物とか創れるのか？た  
えば鉄とか。

「無論だね。鉄といわず、この世に存在する物質なら何でも創れるね」

つまり最強なんじゃねえか!?

「あながちそうでもないが・・・まあいい。これで私の役目は終わった。さあ君も目を覚ますんだ」

そうでもないって・・・まあいいか。そうか、もう目覚める時なんだな。これで一生お別れか?

「いや、一生お別れではないが・・・まあそれは君のいる舞台が終わったときだ」

は?どういうことっておわあ!?!急に眩しく!?!

「また必ずソコで会おう西川公平よ。暫し別れの時さ」

うわあああああああああつあ!?!?

『ヤット行ツタノネ』

「待たせてごめんよ」

『待タセテモインダケド、アマリ待タセスギルノモドウカト思ウ  
ワヨ』

「彼の事に熱心になりすぎてしまったかな？まさかあんなに時間がかかるとは思わなかったが・・・」

『アナタと同じ七ガ好きナndeシヨ？ダカラ一週間モ力カタノヨ』  
「・・・そうだね。似ているといってもソコまで似てるとは思わなかったんだがね」

『ソーユウモノデシヨ？案外生物ツテイウノ八自分ノコトニツイテハアマリシラナイデシヨ』

「そうか・・・そうだね。まあでも私は彼を自分に当てはめたくないからね。私に似すぎるのも困るんだが・・・」

『別ニイジヤナイ。アナタニ似タトコロデアナタト八別人ナンダカラ』

「君にはいつも慰められてばっかだね。そうだ、今度できたお店にデザートを食いに行こうか」

『エッ！？本当！？行く行く！コレデ待タサレタ分ハチャラニシテアゲル！アハハハハ！！』

宵闇はまだ続く・・・

## 第十曲（後書き）

この話でめだかボックスは一旦書き止めます。理由は知られざる英雄が出てくる先以降が全く分からないからです。

ですがちよくちよく書いていきますのでどうぞよろしくお願いします。

## 第十一曲（前書き）

先のことろがちらほらとわかりましたので執筆を再開します。

## 第十一曲

ここは・・・ああ、そうか。新しく能力もらって蘇ったんだっけな。ベクトル変換は自分の運動ベクトルしか操れなくなったが、新しい能力が強かったからいいか。さて、今はどの場面だ？

『じゃあ、消えてね』

『！！』

なんだこの場面？球磨川が皆を殺そうとしているぞ？チツ、ここで原作と違う展開か。しかし・・・今がチャンスか。球磨川が俺に気づいている様子もないし。それに能力の調整もしなければならいからな。うーん、とりあえず・・・結晶でも喰らえ！

俺が手に力を籠めると、手から1m位の結晶の槍が出来た。それを球磨川に向かって投げる。その際、腕にかかる運動ベクトルを操っておいた。

案の定球磨川の腹を貫いた。が、蘇るだろうな。せこいな・・・人のこと言えんが。

『！？』

「おいおい、何俺が死んだト思ってるわけ？」

『・・・おかしいなー、君は死んだはずなんだけど』

「ハッ、俺がああ程度で死ぬわけねえだろ」

『へー、ますます公平ちゃんが化物に見えてくるよ』

「それ八どうも」

更に結晶の槍を十数本生成していく。と同時に段々疲れてくる。ああそうか。原子や分子を変えたり生み出したりしてて脳が大量に情

報を処理しているからか。

・・・そおいや反射って脳が無意識下で演算処理しているんだっただ。で、一方通行はその演算パターンをデフォルトに設定しているんだっただっけな？

つまりだ。俺の能力もそおゆうことが出来る可能性があるわけだ。あれ？これって強くないか？自分は無敵ってわけだろ？木原神拳みたいな能力対策をやられない限りだけどな。

「公平！大丈夫だったのか！？」

「ああ人吉力。見てノ通りピンピンしてるぜ」

「見ての通りって・・・霧囲気が全然違うじゃねーか」

「ああそうか。・・・霧囲気が違う理由は俺ガ今『過負荷』<sup>マイナス</sup>状態二近いからだ。故二霧囲気が違うノ八至極当然だ」

「『過負荷』！？」

「へー、道理で。うん、今の状態じゃあ僕の方が「過負荷」は上だけど、完全に「過負荷」状態になったら僕なんか足元にも及ばないね。いやー恐ろしいなあ」

といいつつ螺子投げってくる球磨川さんパネえ。だけど俺も負けてねえぜ？

ガギイン！と螺子が俺の前に出てきた結晶によって弾かれた。

これこそが一方通行の反射原理を利用した俺の自分だけの空間だ。空間内に入った瞬間に結晶が生成され、防御してくれる！まあ反射みたいな攻撃性はないがな。

「いやいや、球磨川コソ自分ノ『過負荷』じゃナイノニそノ『大嘘憑き』ヲ（原作より）ほトンド操ってイる時点デ俺ト恐ろシさハさホド変ワランサ」

「・・・公平ちゃんは色々な事をしってるね。んー、このまま生かしておくその後々困りそうだなー。うん、また殺してあげようかな」



「残念ダガ・・・」

俺がそう言った瞬間、球磨川に十数本の結晶の槍が刺さった。まだまだだ、まだ終わらんよ！！

『グフツ！？』

「ご退場願おうカ！」

『！？』

腹に刺さってる結晶ごとおもいつき蹴ってやった。

元々の身体能力＋運動ベクトル変換＋空気抵抗を減らす＝よっぽどの奴じゃない限り死ぬ蹴りが出来上がるのだ。

蹴りを受けた球磨川は入り口方向へ飛んでいった。うむ、これでもうここにくることはないだろう。来たとしてもまた俺が粉碎するがな。何？一度殺されたのに余裕だなんて？・・・細けえことはいーんだよ！！

つておろ？不完全『過負荷』状態が解けたぞ？・・・ああ、気を抜いたからか。まあしょうがないんじゃないか？初めての能力制御で疲れているのもあるしな。

「ふう、疲れた・・・」

「こ、公平・・・」

「あん？どうした人吉」

「お前そんなに強かったんだな！あの球磨川を倒しちまうなんてよお！！」

人吉はそう言っただけで俺の背中をバンバン叩く。あれ？人吉君そんな性格だっけか？つか痛い。

「痛えよ」

「おっと、ゴメンな」

「西川公平よ、ちよっといいだろうか？」

と、俺が人吉と話していると黒髪めだかが話しかけてきた。俺は反射的に黒神を睨み付ける。

俺は黒神の事は好きではない。普通くらいだ。どちらかと言うと嫌いな方向に入ると前説明したな？

だが、脳は黒神の事に対して拒絶反応的な感じを持っている。俺の中にいる幼女や少女達も黒神の事が大嫌いらしい。

だから、嫌い＋大嫌い＋拒絶＝俺の周りに立つ的な感じになる。脳が拒絶反応を起こしているのは、恐らくだが復讐に無縁な奴だからだろうな。黒神は復讐心が全くといっていいほどない。だからムカツク。そんだけだ・・・と思う。

「・・・何だ？」

「いや、ただお礼が言いたくてな」

「お礼？いらねえよ」

「いや、あのまま球磨川に攻撃されていたら全滅していたかも知れないのでな。その球磨川を撃退してくれて、我が生徒会のメンバーやお姉さま達を守ってくれた。お礼するのは当然だろう？」

「幼女や少女から貰うお礼なら喜んで受け取るが、テメエのお礼だけは死んでも受けとらねえ」

「ちょよ、公平！？何言ってるんだ！？」

「貴様ア！！めだかさんに向かってグヘッ！？」

阿久根が掴みかかってきたから踵落して潰しておいた。まったく、なんでもかんでも暴力を先に振るった方が悪いんだからな。

「黒神めだか」

「なんだ？」

「俺はテメエのことが大嫌いだ」

「ほう」

「だからお礼とか言われると虫唾が走るんだよ」

外野達がひどいだのめだかさんに謝れだの言ってるがスルーしておこう。ほら、俺正直者だしさ（どこが）？こおゆう事は正直に言わないとね。

「私の事が大嫌いだろうが虫唾が走ろうが、私達を助けてくれたのには変わりはないだろう？だから素直にお礼を受け取ってくれ」

「・・・チツ。ならよお、一つだけ頼みがあるんだがぁ・・・聞いてくれるか？」

「うむ、どんと言うがいい！」

でかい胸を張る。だが残念！俺は巨乳はいけるけどロリじゃなきや意味がないのさ！って痛い痛い！！レイア！止めてくれ！

体の中から攻撃とか痛すぎるんだが・・・。何？俺が悪いって？あー、それは悪かったな。後で何か買ってあげるから・・・喜んでくれて何よりだ。

「俺を生徒会に入れてくれ」

「ほう、理由は？」

「恐らくだが、マイナス十三組は生徒会に戦いを挑むだろう」

「戦い？・・・生徒会選挙か？」

「その可能性もあるし別の可能性もある。ただいえることは、俺はマイナス十三組と戦いたい。ただそれだけだ」

「・・・よかろう、西川を生徒会に入れようではないか！」

「もつ言つことは無いだろうが・・・サンキュウ」

さて、これで俺も晴れて生徒会のメンバーだ。生徒会選挙までまだ

時間が有るし、その間能力の制御の練習をしようかね。  
つてあれ？突然視界が真つ暗に……。ああそうか。疲れすぎたの  
か。チツ、一先ずは寝るか。睡眠を取れば回復するだろう。  
グラツと俺の体が傾く。だが誰かに抱きかかえられる気配がした。  
ああ、これは……

## 第十一曲（後書き）

球磨川さんのブックメーカー、強いのが分からない……。恐らく強いと思うが……。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7580p/>

---

復讐を手伝いし者

2011年4月5日23時26分発行